

Title	レオ・シュトラウスと新自由主義（共同研究報告：グローバリゼーション研究）
Author(s)	小野澤, 信一
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-4 : 14-15
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2333
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

【グローバルゼーション研究】
レオ・シュトラウスと新自由主義

2009年10月5日、聖学院本部新館2階において、本年度第3回「グローバルゼーション研究」研究会が19名の参加者の下に開催された。講演者は、早稲田大学・政治経済学術院より飯島昇蔵教授をお迎えして、上記のテーマについての発表が行われた。概要は以下の通りである。

本研究会の目的は、レオ・シュトラウス（Leo Strauss 1899-1973）というアメリカの政治学者を学ぶことを通し、新自由主義を振り返って整理し、さらにはその新自由主義における問題点まで掘り下げることである。

はじめに、レオ・シュトラウスという人物を知るために彼の略歴を振り返るところからはじまった。簡潔に述べるとHeinrich MeierによるシュトラウスのBibliographyの紹介と、シカゴ大学にあるレオ・シュトラウス・センターにおける資料をもとに彼の略歴が紹介された。

次に、現代日本におけるシュトラウスへの関心の実態を確認した。現在日本では、広島大学平和科学センターにおいて「現代アメリカの外交政策とシュトラウス」の研究、立命館大学アメリカ研究における「Pluralismとシュトラウス」、ヘーゲル学会における「ヘーゲルとレオ・シュトラウス」シンポジウム、同志社大学における「一神教の再考文明の対話」研究会などが行なわれているほかに、シュトラウスの著作の邦訳も幾つか出版されている。

さらに、本題のシュトラウスと新自由主義との関連だが、ここでは新自由主義における問題点を経済の側面から見て、日本の銀行に対する政府の規制緩和により起こった単一化や、格差社会を生み出したという弊害が、教育現場でも同じことがいえるとのことであった。

最後にまとめとして、古典的政治哲学とデモクラシーとリベラル・エジュケーションについて触れ、古代と現代におけるデモクラシーやリベラル・エジュケーションの捉え方の違いが指摘された。

質疑応答では、シュトラウスと関係の深い人物やシュトラウスの思想に関する質問があり、議論の中ではホッブス、ルソー、ロックなどの思想、ウィーバーやマキャヴェリなども取り上げられ、バラエティーに富んだ質問の中で議論が行われた。

(文責:小野澤信一 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程)
(2009年10月5日、聖学院本部新館2階)

